はじめに

市民こそ横浜の主人公

横浜に新しい血潮がよみがえり、明日への脈動を始めました。横浜のまちは戦後二十年をへて、はじめて市民の手にもどったのです。

これまで市民が、本当にこの愛する横浜という都市を自分のものとして感じたことがあったでしょうか。のろわしい戦争と戦災による壊滅、それが終ってみると、占領軍が港も街の中心街も接収してしまい、外国の軍人が、わがものがおに街を占領してしまいました。昭和二十七・八年になって、中心部だけは接収が解除になり、やっと横浜は市民の手にかえるのかと思いましたが、そうではありませんでした。

よその都市がどんどん都市づくりを始め、産業も発展させていたのに、横浜は接収のため、非常に立ちおくれていました。そして、昭和三十年頃から、日本の経済はどんどん工業化されてきますが、横浜は立ちおくれたまま工業化の大波にまきこまれてしまったのです。市民の生活よりはまず経済の復興という工業立市のかけ声によって、根岸湾に大工場地帯をつくる埋立が始められ、東海道沿線や内陸には新しい工場がたてられ、市民生活よりは産業優先、産業活動のための基盤づくりに、市政の重点がおかれました。市民が都市の主人公として、扱われてこなかった

のです。

全国的にそうであるように、産業とその基盤優先のやり方は、経済活動を高めることに急であって、国民生活を向上させる点では、かえって大きなマイナスを生じさせたことが、やがてだれの目にもはっきりしてきました。つまり、工業は発展したものの、他方には大都市への人口の集中、地価の上昇、住宅不足、公害の発生、交通地獄など、都市の生活環境は全くゆがめられてしまったのです。三十八年九月に発表した新しい「市政への考え方」で、つぎのような方向を定めたのはそのためです。

「横浜の工業化がすすめられてきましたが、それを急ぐあまり、都市の構造上、動脈ともいえる道路、下水施設をはじめ、各種の公共施設に著しい不均衡と地域格差を生ずる結果となったのです。

このさい、私は新しい角度から、全市域を眺めわたし、市政の現状を検討し、ゆがみと格差是正に細心の注意を払わなければならないと思います。そうした点からみて、これからの施設の重点は、工業化とともに市民の生活環境の整備を行ない、市民に直結する地方自治を実現していくことにあると考えます。」

このように、新しい市政の方向は、一六〇万市民が横浜の主人公であることを確認することから始まりました。そして、市政の重点を、工業化から市民生活の環境整備に移したのです。そうした考え方にたって、新しい市政は「子供を大切にする市政」、「だれでも住みたくなる都市づくり」を二本の柱にして、市政の中心に本来あるべき市民の生活をどっかりとすえ、市民の税金は市民に返すという政策をとりました。